

日本語授受表現に対する中国語話者の認識

水野 かほる

1 はじめに

人と人の間の物や行為の移動を表す表現を授受表現とか「ヤリモライ」表現と言うが、これを表す動詞には、「ヤル、アゲル、サシアゲル」「クレル、クダサル」「モラウ、イタダク」の三組7種類があり、これらの動詞は本動詞として、また、「～テアゲル」「～テクレル」の形で補助動詞としても用いられる。これらの表現は授受という一つの事柄を表すのに7つの形を使い分けねばならず、非常に複雑である一方で日常頻繁に使われるところから、外国人日本語学習者にとっては難問の一つであると言える。

本稿では、中国語を母語とする日本語学習者を例にとり、従来のような誤用という観点ではなく、日中の授受表現の相違と理解という面から中国語話者の日本語授受表現を考えてみたい。

2 授受動詞の意義

いわゆる「ヤリ・モライ」を表す三組の動詞「ヤル（アゲル）」「クレル」「モラウ」について、宮地（1965, p. 25）は、その構文解釈上の意義として、①人間関係における物の授受およびその方向概念、②話し手の関与を挙げている。

- (1) 太郎が次郎にアンパンをやる。
- (2) 太郎が次郎にアンパンをくれる。
- (3) 太郎が次郎に／からアンパンをもらう。
- (4) 太郎 → 次郎
- (5) 太郎 ← 次郎

例えば、上の例文において、(1)(2)では(4)の矢印の方向への物の移動を表し、アンパンが太郎から次郎へ移る。それに対し、「モラウ」を用いた文ではこの関係が逆になり、(5)のように次郎から太郎にアンパンが移動することを表す。つまり、同じ出来事を誰の立場で述べるかによって動詞が変わり、同時に物の移動の方向も変化するのである。

また、話し手が事柄にどのように関与するかによっても表現上の制約が生じる。例えば、(6)(7)は話し手が受け手の側に立って述べるときにのみ可能であるし、(8)の文は、与え手であり動作主である山田さんが話し手より目上であると解釈できる。

(6)* 私が太郎にお菓子をくれた。(＊は非文であることを表す)

(7) 太郎が私にお菓子をくれた。

(8) 山田さんに辞書をいただいた。

授受動詞の持つ同様の意義は、「ヤル (アゲル)」「クレル」「モラウ」が補助動詞として用いられる場合にも成立する。

(9) 花子は山田先生に本を貸していただいた。

X Y

(9)の例文から、聞き手は次の5つの要素についての情報を得ることができる。

- ① 主語
- ② 行為の授受とその方向
- ③ 恩恵の授受とその方向
- ④ 話し手の立つ側
- ⑤ XとYの人間関係

ところで、授受動詞・補助動詞を使用して事柄を表現する際に、話し手が与え手側に立って述べるか受け手側に立って述べるかを、話者の「視点」として考えることができる。久野(1978)は、「視点」を話し手がどこにカメラを置いて出来事を描写するかのカメラ・アングルと捉え、それを表す手段として「共感(Empathy)度」という概念を設定した。久野によれば、授受動詞の視点制約は次のように設定できるとされる。

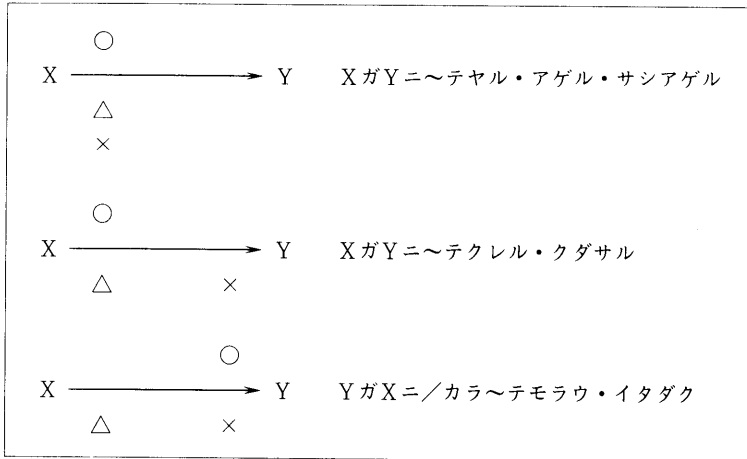
ヤル…話し手の視点が主語(与える人)寄りか、中立のときにのみ用いられる。

クレル…話し手の視点が主語よりも与格目的語（受け取る人）寄りのときのみ用いられる。

補助動詞「クレル・ヤル」…「テクレル」は主語よりも非主語寄りのときに使用される。「テヤル」は非主語より主語寄りのときに用いられる。

モラウ…非主語よりも主語寄りの視点を要求する。(久野 1978, p. 141, 152, 160)
 表現の主体である話し手が誰の立場から事柄を見ているかを話し手の視点と考えるならば、上述の①～⑤は図1のように表すことができる。これは、Xを起点としYを目標とする行為の移動を表している。ここで、「～テヤル」「～テアゲル」「～テサシアゲル」は、与え手を主語とし、さらにその与え手の位置するガ名詞句に動作主と話し手の視点が併置される構造であることを示す。これと「～テクレル」「～テクダサル」との違いは、「～テヤル」「～テアゲル」「～テサシアゲル」は話し手の視点が与え手にあるのに対して、「～テクレル」「～テクダサル」は視点が受け手に位置することにある。それに対して、「～テモラウ」「～テイタダク」ではガ名詞句は受け手となって、「～テヤル」「～テアゲル」「～テサシアゲル」とは動作主は一致するが主語と視点が違っており、「～テクレル」「～テクダサル」とは動作主と視点は一致するが主語が異なっている。

図 1



(○主語 △動作主 ×話し手の視点)

以上のように、授受表現に関しては、物や行為の移動の方向と、話し手がどこに視点を置くか、話し手と与え手・受け手の人間関係を中心に説明がなされてきた。従って、外国人に日本語を教える際にも、これらの動詞の使い分けとそれに伴った適切な助詞の使い方に重点を置いていたと言える。

3 中国語の授受動詞構文

中国語の授受動詞には、「給」「収」「要」などが存在するが、そのうち与え動詞²⁾としては「給」が最も一般的で、これ一語で日本語の「ヤル」「アゲル」「サシアゲル」「クレル」「クダサル」に対応する。

- | | |
|----------------|---------------|
| (10) 我給了朋友一本書。 | 私は友人に本をやった。 |
| (11) 我給了朋友一本書。 | 私は友人に本をあげた。 |
| (12) 我給了老師一本書。 | 私は先生に本をさしあげた。 |
| (13) 朋友給了我一本書。 | 友人が私に本をくれた。 |
| (14) 老師給了我一本書。 | 先生は私に本をくださった。 |

(10)~(14)の例から分かるように、「給」は「与える」でも「受ける」でもなく、与え手と受け手との間に授受関係が生ずることを表すにすぎない。つまり、「給」は単なる与え動詞であって、日本語の与え動詞を弁別する要因である、与え手と受け手の人間関係によって決まる敬語か非敬語か、身内へかよそ者へかを問わない。また、話し手の視点を明示しないので、与え手と受け手の関係によって「ヤル」「アゲル」「サシアゲル」「クレル」「クダサル」が判断される。

次に、日本語の「モラウ」「イタダク」に相当する受け動詞については、中国語でこれに当たるものには「要・収・受・接・拿・領・收受・收到・接受・接到・得到・領受・領取」などがあるが、それぞれ少しずつ用法が異なり、「給」のようにそれ一語でほとんど用が足りるといような一般的な受け動詞はないようである(奥津 1984a, p. 81)。このことから、奥津(1983, 1984a)は、中国語は与え動詞が受け動詞より優勢な体系を持つ言語であると結論づけている。事実、日本語では「モラウ」「イタダク」と訳されている場合でも、中国語では「給」を使用している例は多い。

(15) 這塊表是母親給我的。 この時計は母からもらった。

(16) 田中老師給了我一个本子。 私は田中先生からノートをいただいた。

一方、授受補助動詞については、日本語の授受補助動詞にぴったり対応する中国語の動詞はないと言った方がよいようである（奥津 1984b, p. 15）が、本動詞のときと同様、給与補助動詞では「給」を使用することができる。

(17) 總給爺爺讀報。³⁾ いつもおじいさんに新聞を読んであげる。

(18) 朋友給我拿花來了。 友だちが私に花を持って来てくれた。

しかしながら、次の(19)の例では「給」を使用しなくても文が成立する。

(19) 田中老師教了我們英語。 田中先生は私たちに英語を教えてくださいました。

取得補助動詞では「請・讓」などが用いられる。

(20) 這張画是在法国讓父親給買的。 この絵はフランスで父に買って来てもらった。

(21) 讓李先生把王先生請(叫)來了。 李さんに王さんと呼んで来てもらった。

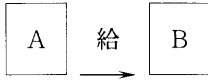
これらの表現もその主語に人称関係の制限はなく、身内・よそ者の区別もない。いずれも使役文であり、「請」の主語に話し手側の者が置かれた場合にだけ「～テモラウ」「～テイタダク」と訳すことができる（奥津・徐 1982, p. 103）。

以上、中国語の授受表現を日本語と対照しながら考察してきたが、一般的に言って、中国語の授受動詞には敬語・非敬語、身内・よそ者の区別がない上、日本語のように話し手の視点の位置によって授受動詞を使い分ける必要もなく、中立的客観的に事実を表現する。また、「給」で授受表現のかかなりの部分をカバーすることから分かるように、与え動詞優位であると言えよう。

4 中国語話者の日本語授受表現

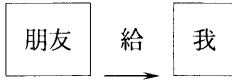
以上のような構造を持つ中国語を母語とする中国語話者にとって、日本語授受表現はどのような意味を持つのであろうか。前記の例文を基に考えてみたい。

授受本動詞を用いた例文(10)～(16)は皆、下のような構造を持っている。



〔Aは与え手／動作主，Bは受け手，
→は物の移動の方向を表す。〕

(13)' 朋友給了我一本書。



友人 が 私 に本をくれた。

(16)' 田中老師給了我一个本子。



私は 田中先生 から (私に) ノート
をいただいた。

(13)' の「クレル」を用いた文では、中国語文・日本語文ともに動作主／与え手と受け手がこの順序で表され、動作主／与え手が主語である、与え動詞文としての構造をとっている。しかし、(16)' の「イタダク」使用の日本語文では中国語とは違って受け手の「私」が主語の位置にあり、(私に)の部分が言われないことが多いために、受け手の分かりにくい文となっている。

給と補助動詞の場合も同様に考えられる。

(18)' 朋友給我拿花来了。



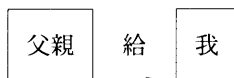
友だち が 私 に花を持って来て
くれた。

(→は行為の移動の方向を表す。)

取得補助動詞の場合は、中国語の例文に話し手側が受け手であるという「～テモラウ」「～テイタダク」の意味情報を付加して考えることにより理解できる。つまり、ここでも「給」を使用した与え動詞文として理解できるが、その日本語訳には本動詞の場合と同様、受け手が現れてこない。

(20) 這張画是在法国讓父親給

<我>買的。

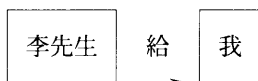


この絵はフランスで 父 に (私に)

買って来てもらった。

(21) 讓李先生把王先生請<給我>

(叫) 来了。



李先生 に王さんを(私に)呼んで来て

もらった。

中国語は奥津の指摘通り、与え動詞優位の言語であると考えられるであろう。とすれば、中国語母語話者にとっては、中国語と同じ統語構造を持つ「ヤル」「アゲル」「サシアゲル」「クレル」「クダサル」は理解し易いが、与え手と受け手の位置が中国語と異なり、受け手の明確でない「モラウ」「イタダク」使用文は理解が難しいのではないかと思われる。

奥津 (1984a, p. 75) は、前節で述べた、中国語において与え動詞が優勢である理由について、次のように書いている。

この場合、給与動詞が優勢であるのは、<事物>の移動をまずひきおこすのは<与え手>であって、これに<視点>が置かれやすく、取得動詞はその結果を受けるという受動的な働きしか表わさないからであろうか。

また、Uyeno et al. (1978) を例に挙げ、与え手に視点が置かれ易いが故に、幼児の授受動詞の習得は「アゲル」「クレル」が「モラウ」より早いとしている。奥津は、与え動詞文では与え手が主語になり、受け動詞文では受け手が主語になり、話し手はそこに視点を置くと考えて、与え動詞文は与え手に視点があるとすが、それでは「クレル」「クダサル」も「ヤル」「アゲル」「サシアゲル」と同じく与え手（主語）に視点があることになり、前述の久野の理論と矛盾してしまう。「クレル」「クダサル」が、より話し手に近い受け手に視点を置いた表現を構成することは、(22)(23)から明らかである。従って、与え手 = 視点の場と判断することは適切ではないと考えられる。

- (22) a *私は妹にリンゴをくれた。
 b 妹は私にリンゴをくれた。
- (23) a 兄は弟にミカンをやった/*くれた。
 b 弟は兄にミカンをやった/*くれた。
 c 兄は弟にミカンをもらった。
 d 弟は兄にミカンをもらった。

奥津 (1984a) で引用された Uyeno et al. (1978) は、日本人の幼児を対象とした三つの実験より次のような結果を得ている。

- ① 「アゲル」「クレル」文は「モラウ」文より早く習得される。
- ② 授受動詞「クレル」はしばしば「アゲル」に間違えられるが、「モラウ」を「アゲル」「クレル」に誤解する割合は低い。
- ③ 受身文に対する理解度は「モラウ」文のそれとほとんど変わらない。

そして、Uyeno et al. はこれらの実験結果から、次のような仮説を提出している。

- ① 「アゲル」「クレル」文においてガ名詞句は動作主/起点の役割を果たし、「モラウ」文と受身文ではガ名詞句は受け手/目標の役割をしている。そして、「アゲル」「クレル」文でガ名詞句を動作主/起点と見なすという前者のストラテジーは後者より早い段階で形成される。
- ② 幼児は「アゲル」「クレル」と「モラウ」間において、対象の移動の方向が違っていることを理解しているが、①で述べたガ名詞句を動作主/起点に転用するストラテジーの拡大が「モラウ」文理解の発達を抑制するように干渉する。
- ③ 「アゲル」と「クレル」の違いは話し手の立場の指定にあり、これは①のストラテジーとは別のものである。

この Uyeno et al. の研究成果は、外国人日本語学習者の授受表現習得を考える際にも参考にとできると思われる。吉川 (1983)、堀口 (1984) は日本語学習者の「ヤル (アゲル)」「クレル (クダサル)」間の誤用の多さを指摘し、相原 (1986) はその原因を「クレル」における動作主と視点の位置の違いに求めている。

授受表現の習得を考える場合、それが第一言語であるか第二言語であるか、ま

た第二言語習得ではその母語によって当然条件が異なってくる。しかし、第一言語習得においても第二言語習得においても、「アゲル」と「クレル」が混同され易いという共通点を持っている。「アゲル」「クレル」の混同については、相原、Uyeno et al. が指摘するように両者の視点の置きどころの相違によると思われる(図1参照)。だが、Uyeno et al. の研究において「アゲル」「クレル」の習得が「モラウ」の習得より早いという結果が得られたことは、「アゲル」「クレル」の習得を「モラウ」の習得より早めている要因が、視点の相違より重要な意義を持っていることを示している。Uyeno et al. はそれをガ名詞句を動作主/起点に転用する知覚ストラテジーがより早期に習得されるためであると捉えているが、果たしてそのように断定できるであろうか。久野(1978, p. 163)は「モラウ」について以下のように記述している。

行為主体を主語の位置ではなく非主語の位置(奪格)に置く数少ない動詞である。この様な特殊な動詞を話し手がわざわざ用いるには、何か特別な理由、即ち、行為主体ではなくてその行為対象(与える、或いは送る相手、話す相手)に対する視点的接近がなければならない。

「モラウ」に対してのこの論理は受身文にも当てはまる。「モラウ」や受身文は他の授受動詞文と異なり、動作主(行為主体)を奪格に置くことによって、目的語よりの視点をとることを表すと考えられる。与え動詞優位の中国語授受表現では、与え手(動作主)が主語に位置するのが一般的であり、また視点を考慮する必要がないのであるから、中国語話者にとっては、受け手を主語とし与え手(動作主)を奪格に置く「モラウ」「イタダク」を用いた文の理解が他の授受動詞文以上に難しく感じられることが予測できる。

5 中国語話者における日本語授受補助動詞表現の認識

以上の仮説を立証するために、日本語話者と中国語話者に対して調査を行った。対象としたのは、日本語の中で頻繁に授受補助動詞が使用される依頼場面と恩恵的な行為を誰かから受けたことを第三者に伝える場面である。

<調査期日> 1993年8月

〈被調査者〉 中国語話者10名（男5 女5）

いずれも愛知県内の大学に在学する26～52歳の大学院生と研究生。

日本語学習歴：4年～18年6か月

日本滞在歴：5か月～6年7か月

日本語話者12名（男6 女6），年齢：23～37歳

〈調査内容〉

調査内容は二つに分かれており、各被調査者が様々な場面でどのような発話を行うかを問う質問紙の形式をとっている。⁴⁾調査Ⅰは、相手と依頼遂行時に相手にかかる負担が異なる12の状況における24場面⁵⁾において、実際に依頼する場合の言語表現を調べるものである。依頼の場合、「～テクレル」「～テクダサル」「～テモラウ」「～テイタダク」の授受補助動詞を使用して、「～てくれませんか。」「～ていただけますか。」といった表現がよく使用される。調査Ⅱは、恩恵を得る行為を誰かから受けたことを第三者に伝えるときに、「～テクレル」「～テクダサル」「～テモラウ」「～テイタダク」のどれを選択するかを調べるものである。調査Ⅱも調査Ⅰと同様、行為者と行為内容の異なる24場面からなる。中国語話者にとって、「～テモラウ」「～テイタダク」よりも「～テクレル」「～テクダサル」の理解が容易であるならば、後者を使用した表現が選ばれ易いであろう。

〈結果〉

調査結果を表1、表2に挙げる。

調査Ⅰ：中国語話者の「～テクレル」使用率が若干高いものの、有意な差は見られない。日本語話者に「その他」の表現が多く、中国語話者に「～テイタダク」を使用した表現が多くなっている。「その他」の表現とは、依頼をするに至る経緯や理由を述べたり、「～て欲しいんですけど。」「～てもいいですか。」などの希望や許可を求める表現を指す。また、中国語話者に「～テイタダク」を使用する表現が多いのは、日本語学習過程において、依頼場面では「～ていただけませんか。」「～ていただけないでしょうか。」等の表現を使用するのが無難であると学習したためであろうか。

依頼場面で個人が4つの授受補助動詞のどれを使用するか、或いはしないかを

表1 調査I結果

	相手との 待遇関係		コス ト	日 本 語 話 者						中 国 語 話 者					
	地位	親疎		クレル	クダサル	モラウ	イタダク	その他	合計	クレル	クダサル	モラウ	イタダク	その他	合計
1	上	親	高	0	2	0	11	10	23	0	1	0	13	6	20
2	上	親	低	0	1	0	9	14	24	0	1	0	15	4	20
3	上	疎	高	0	1	2	12	4	19	0	1	0	15	3	19
4	上	疎	低	1	2	4	6	11	24	0	2	1	10	7	20
5	同	親	高	4	0	10	2	8	24	5	0	8	2	5	20
6	同	親	低	3	1	3	0	17	24	9	0	4	0	7	20
7	同	疎	高	1	1	10	2	10	24	0	0	3	10	7	20
8	同	疎	低	2	1	9	3	9	24	1	2	9	5	3	20
9	下	親	高	6	0	10	3	5	24	5	0	12	3	1	21
10	下	親	低	5	1	6	0	12	24	8	1	5	0	6	20
11	下	疎	高	1	2	12	2	3	20	4	1	10	3	2	20
12	下	疎	低	3	2	6	2	9	22	2	4	9	1	4	20
合計				26 (9.4%)	14 (5.1%)	72 (26.1%)	52 (18.8%)	112 (40.6%)	276 (100.0%)	34 (14.2%)	13 (5.4%)	61 (25.4%)	77 (32.1%)	55 (22.9%)	240 (100.0%)

表2 調査II結果

	相手との 待遇関係		コス ト	日 本 語 話 者						中 国 語 話 者					
	地位	親疎		クレル	クダサル	モラウ	イタダク	その他	合計	クレル	クダサル	モラウ	イタダク	その他	合計
1	上	親	高	2	18	2	2	0	24	0	12	0	8	0	20
2	上	親	低	2	10	1	11	0	24	0	11	0	9	0	20
3	上	疎	高	2	10	1	10	0	23	0	9	0	11	0	20
4	上	疎	低	1	9	3	11	0	24	0	6	0	14	0	20
5	同	親	高	13	0	10	0	0	23	9	0	10	0	0	19
6	同	親	低	11	0	11	0	0	22	14	0	6	0	0	20
7	同	疎	高	11	1	9	1	0	22	8	0	12	0	0	20
8	同	疎	低	2	0	18	0	3	23	3	0	17	0	0	20
9	下	親	高	20	0	2	0	0	22	17	0	3	0	0	20
10	下	親	低	2	0	22	0	0	24	10	0	10	0	0	20
11	下	疎	高	14	0	10	0	0	24	6	0	14	0	0	20
12	下	疎	低	5	0	18	0	1	24	5	0	15	0	0	20
合計				85 (30.5%)	48 (17.2%)	107 (38.4%)	35 (12.5%)	4 (1.4%)	279 (100.0%)	72 (30.1%)	38 (15.9%)	87 (36.4%)	42 (17.6%)	0 (0.0%)	239 (100.0%)

決定するための考えられる要因には、母語の干渉以外に、どのような相手に対してか、相手にかかる依頼の負担の程度（コスト）はどの位か、あらたまった場面か気楽な場面かなどがあるが、本調査では依頼者に対する相手の地位・親疎関係、コストの高低が表現選択に深く関わっていることが示された。

調査Ⅱ：調査Ⅱにおいても、日本語話者と中国語話者の間に授受補助動詞選択上の差異は出てこなかった。従って、中国語話者には「～テクレル」「～テクダサル」を使った表現が「～テモラウ」「～テイタダク」を使用した表現より理解し易く、その志向性が高いであろうという仮説は否定された。しかし、この仮説は、授受表現を与え動詞か受け動詞か、話し手の視点の位置により与え手と受け手やガ格とニ格の位置が変換するという従来の説明を基にしたものであるため、調査の結果は従来の考え方への疑問を投げかけるものでもある。その点ではもう一度仮説を見直す必要があるが、調査方法の妥当性という問題も考えられる。

ところで、調査Ⅱにおいての授受補助動詞選択の要因には、調査Ⅰで述べた要因以外に、話し手の、自分に恩恵行為を与える相手に対する意志・働きかけの有無が関与していると思われる。特に、「～テクレル」「～テクダサル」と「～テモラウ」「～テイタダク」の選択に関しては、この要因の持つ意義が大きいと思われるので、次節ではこれに関して若干説明を加えたい。

6 「～テモラウ」の意志性

「～テモラウ」の意味として、「積極的に意志を表明・要求して利益を得る」というものがある。例えば次の例文からは、要求の意味が読み取れる。

(24) 2, 3日しても熱が下がらなかつたら、医者に診てもらった方がいい。

調査Ⅱのように、利益的行為の取得を第三者に告げる場面では、文脈から「～テモラウ」「～テイタダク」を使用する表現に話し手から恩恵の与え手への働きかけが感じられ、「～テクレル」「～テクダサル」と「～テモラウ」「～テイタダク」の使用を区別する根拠となる場合がある。次の(25)は、調査項目中で、日本語話者の全員、中国語話者の10人中8人が「～テクレル」を選んだ文である。

(25) 先週の日曜に新しいアパートに引越したんだけど、〔 〕ので、早くかた

づけることができました。

a. 野村さんが朝から来て、重い荷物を運ぶなどして手伝ってくれた

b. 野村さんに朝から来て、重い荷物を運ぶなどして手伝ってもらった

この文では、bの「～テモラウ」を使用した文では、話し手が予め野村さんに頼んでおいて引越しの手伝いをしてもらったと解釈できる。ところが、「野村さんが……ので」の前の節が接続助詞「ケド」で終わっているために、後に続く事柄が前で述べる事柄から予測されるのと反対の展開であることが必要となり、予め野村さんが手伝ってくれることを知っていることになる「～テモラウ」はふさわしくないと判断されたと思われる。

調査Ⅱの結果では、このように授受補助動詞の選択が被調査者によって特定の補助動詞に限定されたものと判断の分かれたものがあるが、全体を通して見た結果では日本語話者と中国語話者の選択は類似しており、今回の調査の被調査者である中国語話者は「～テモラウ」の持つ意志性をかなり理解しているものと言えよう。

もっとも、日本語話者と中国語話者の意見が分かれた項目もあり、そこで以下において、4つの例からその原因を探っていくことにする。

㉒ 先週南山大学でB先生の講演会があったので是非聞きたかったですけれど、母の具合が急に悪くなって行けなかったんです。でも、〔 〕。

a. 加藤さんに講演会の話を書き録音してもらったので、聞くことができました。

b. 加藤さんが講演会の話を書き録音してくれたので、聞くことができました。

㉒では、日本語話者の7人が「～テモラウ」を選択（「～テクレル」3人）しているが、中国語話者で「～テモラウ」を選んだのは2人（「～テクレル」8人）しかいない。㉒は逆説の接続詞「デモ」をはきんで、先行文で不可能だと思っていたことが後行文で可能になったことを表現するが、単に先行部分で表そうとする事柄と後続部分での事柄が反対であるというだけであれば、「～テクレル」を使っても構わないはずである。それにも関わらず日本語話者の多くが「～テモラウ」を選んだのは、先行文中に「是非聞きたかった」という、話し手の実現を希望・欲求する感情を表す表現があるためと考えられる。話し手が強く希望して

いるのであれば、それが誰かへの要求となることは当然予想される。

(27) 昨日、修士論文を書くのに必要な本を探していたんだけど、図書カードにはあるのにどこを探しても見つからなくて困っていたら、〔 〕。

a. 図書係の鈴木さんが2時間もかかって探し出してくれたので、本当に助かりました。

b. 図書係の鈴木さんに2時間もかかって探し出してもらえたので、本当に助かりました。

(27)では日本語話者は全員が「～テクレル」を選んだが、中国語話者は4人が「～テモラウ」を選択している。この違いの原因は「困っていたら」の部分にあるのではないと思われる。「困っていたら」というのは、「困っている」という状況が後件成立の条件になるということであって、話し手の意志は関与しない。中国語話者は「困る」という語に話者の意志を感じたのであろうか。

(28) 図書の仕事で、三日間で500枚のカードを整理しなければならなかったんだけど、〔 〕。

a. 加藤さんが手伝ってくれたので、なんとか間に合ったんです。

b. 加藤さんに手伝ってもらったので、なんとか間に合ったんです。

この例では、日本語話者の11人が「～テクレル」を選んでいるが、中国語話者では「～テクレル」は5人となっている。ここでは(25)の例と同じく接続助詞「ケド(ケド)」が用いられ、(25)で説明したように「～テクレル」を用いるのが適当であろう。それにも関わらず中国語話者に「～テモラウ」使用が少くないのは、「ケド」に続く「整理しなければならなかった」に話し手の意志を感じたためかもしれない。

(29) 野村さんに2か月前に本を貸したんだけど、私もその本、どうしてもまた必要になったので、返してほしいと思っていたんです。それで、今日やっと〔 〕。

a. 返してもらいました。

b. 返してくれました。

日本語話者の全員が「～テモラウ」を選択したが、中国語話者は4人が「～テクレル」を選んだ例である。この例では、最初の文に「返してほしい」とあり、

話し手が本の返却の実現を望んでいる気持ちが表れている。また、後続文の「やっと」に長い間の望みがようやくかなうのだという心情が出ている。

さて、これまで日本語話者と中国語話者の判断が分かれた4例を基に、「～テモラウ」の意志性という見地からその相違の原因を考察してきたが、いずれもその要因として恩恵の行為を与えてくれる相手への話し手の要求の意志・感情が文脈中に感受できるかどうかがあると思われる。もちろん、話し手の相手への依頼の可能性も授受補助動詞選択に関わっているが、特に話し手の態度や関係を表すムードの解釈において、日本語話者と中国語話者の間にややズレが存在しているようである。

7 おわりに

本稿は、日本語学習者にとって一般に難しいとされる授受表現に焦点を当て、各授受動詞・授受補助動詞の意義を概観した上で、中国語授受表現との構文的相違から中国語話者にとっての日本語授受表現を考察したものである。

従来、日本語の三組の授受動詞に関しては、その相違点について、与え動詞か受け動詞か、また話し手の視点の位置をどこに置くかによって、与え手と受け手にガ格を取るかニ格を取るか、という点での説明がなされてきた。そこで、これらの日本語授受動詞の意義と学習者の母語との対照という前提に立って日本語授受表現を考えた結果、次のような予測を立てた。中国語は一般的に与え動詞優位の言語と考えられる。従って、行為を引き起こす与え手を主語とする「ヤル」「アゲル」「サンアゲル」「クレル」「クダサル」を用いた表現の方が「モラウ」「イタダク」を用いた表現より中国語話者には理解し易い。そしてこれを立証するための調査を行ったが、仮説を支持するような結果は得られなかった。ただ、調査Ⅱにおける授受補助動詞の使い分けには、「～テモラウ」の持つ意志性に関わっていると考えられ、話し手のムードを表した部分が要求と解釈されるかどうかという点で、日本語話者と中国語話者の間に隔たりが見られた。

今回の調査では仮説を立証することができなかったが、仮説自体をもう一度検討し直すこと以外に、次のような課題が考えられる。

- ① 調査の方法を見直すこと。より限定された状況を設定し、授受動詞・補助動詞の意義のどの部分が理解し易く、どの部分が理解し難いのかを測定できる調査方法を見つけ出さねばならない。
 - ② 学習レベルによって授受表現の習得がどのように推移するかを調べる。本稿の調査に協力してくれた中国語話者は現在全員日本に滞在しており、日本語能力も高い学習者である。この点も調査結果に影響を与えていると思われる。
 - ③ 「～テモラウ」の意志性については、今回の調査で日本語話者の選択が明確に特定の授受補助動詞に限定された場面に限って再調査することにより、日本語話者と中国語話者の認識の相違をはっきりさせる。
 - ④ 中国語では、与え手を主語とする授受表現（日本語では「～テクレル」に相当）の方が受け手を主語とする表現よりも丁寧とされるが、これは中国語話者の日本語授受表現にどのような影響を与えているか。
- 以上の点を課題として、今後さらに考察を進めるつもりである。

註

- (1) 図1は宮地(1965), 堀口(1979)による。
- (2) 授受本動詞のうち、与え手を主語とする動詞「ヤル, アゲル, サシアゲル」「クレル, クダサル」を与え動詞, 受け手を主語とする動詞「モラウ, イタダク」を受け動詞とする。また、授受補助動詞では、「～テヤル, ～テアゲル, ～テサシアゲル」「～テクレル, ～テクダサル」を給与補助動詞, 「～テモラウ, ～テイタダク」を取得補助動詞と呼ぶことにする。
- (3) 本文中の例文のうち, (17)(18)(20)(21)は次の文献からの引用である。
日本上智大学編, 戴輔中・孟宄凡・趙銘儒編訳(1991)『詳解日語句子結構(上)』
北京出版社(Alfonso, A. (1974) *Japanese Language Patterns a structural approach*. Vol. 1, 上智大学)
- (4) 調査内容に関しては, 調査Ⅰ, Ⅱのそれぞれについて, 以下のような形式で行った。
〈調査Ⅰ〉あなたは大学院修士過程の2年生です。次の場面のとき, あなただったら何と言いますか。(ただし, あいさつや自己紹介は省略してください)

- ① あなたは現在修士論文を書いています。今日はこれから、指導教官のA先生に修士論文の指導をしてほしいと言うつもりです。A先生は50歳ぐらいの男の先生で、個人的な相談をすることもあります。今、先生の研究室にいます。何と言いますか。

〈調査Ⅱ〉次のそれぞれの発話をだれかに伝えるとき、〔 〕に入れる表現としてあなたならa～xのうちどれを使用しますか。使用すると思う表現を一つ選び、その記号に○をつけてください。また、a～xの中に使用したい表現がない場合は、「その他」にあなたの使用する表現を書いてください。

ただし、各発話の登場人物は以下のように考えてください。

あなた…大学院生

加藤さん…同じ大学院の同期生で親しい友人

中西先生…いつも世話になっている指導教官

野村さん…同じ大学院の親しい後輩

山口さん…同じ大学院の同期生だが、たまにしか顔を合わせることはない

横山先生…面識はあるが親しくはない大学教授

鈴木さん…同じ大学院の後輩、親しくはない

- ① 「図書館で借りた本を先週までに返さなければならなかったのに、仕事があった行けなかったんです。でも、〔 〕。」
- 加藤さんが私の代わりに返してくれました。
 - 加藤さんに私の代わりに返してもらいました。
 - その他 ()

- (5) 調査Ⅰ、Ⅱに使用された12の状況とは、依頼したり恩恵を与えてくれる相手の地位が話し手と比べて目上・同等・目下か、親しいか親しくないか、相手に与える負担の程度(コスト)が高いか低いかによる組み合わせを指す。調査はその12の状況ごとに各2場面あり、全部で24場面である。

参 考 文 献

相原林司(1986)「受給表現と視点」『国語科教育』第33号

上野田鶴子(1978)「授受動詞と敬語」『日本語教育』第35号

Uyeno, T., Harada, S. I., Hayashibe, H. & Yamada, H. (1978) "Comprehension of Sentences with Giving and Receiving Verbs in Japanese Children." *Annual Bulletin RILP*. No. 12

奥津敬一郎(1979)「日本語の授受動詞構文—英語・朝鮮語と比較して—」『人文学報』第

132号 東京都立大学人文学部

奥津敬一郎 (1983) 「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較—」『日本語学』4月号
明治書院

奥津敬一郎 (1984a) 「授受動詞文の構造—日本語・中国語対照研究の試み—」金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会編『金田一春彦博士古稀記念論文集第二巻 言語学編』三省堂

奥津敬一郎 (1984b) 「授受動詞文の意味と文法」北京対外貿易学院『日語学習与研究』1984年第一期 (總第二十二号)

奥津敬一郎 (1986) 「やりもらい動詞」『国文学解釈と鑑賞』第51巻1号 至文堂

奥津敬一郎・徐昌華 (1982) 「『～てもらう』とそれに対応する中国語表現—“請”を中心に—」『日本語教育』第46号

久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店

豊田豊子 (1974) 「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」『日本語学校論集』1
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校

堀口純子 (1979) 「年少児の受給表現」F. C. パン・堀素子編『幼児言語シリーズNo.2
ことばの発達』文化評論出版

堀口純子 (1984) 「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』第52号

堀口純子 (1987) 「『～テクレル』『～テモラウ』の互換性とムード的意味」『日本語学』4月号 明治書院

宮地 裕 (1965) 「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』第63号 武蔵野書院

吉川武時 (1983) 「外国人の日本語 誤用分析4」『日本語学』2月号 明治書院

(みずの かほる)